

東方古ノ物語 一
ancient time 一

GAIOS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

むかしむかし、ある神様がいました。

その神様は特別な神として多くの者から崇められておりました。

しかしその神様は突如として消え、記憶を失い地上の迷える竹林に墮ちてしまったのです。

そんな中倒れているところ、1人の兔の耳をした少女と出会います。

そうして幻想郷に新たな異変が巻き起こるのです。

目次

43

― 壺 ―	1	神様の堕ちた場所
― 弐 ―		知らない天井 ― 5
― 参 ―		うさ耳の少女の名は。
9		
― 肆 ―	15	今日という充実した日
キャラ設定		― 23
― 伍 ―		半霊半人剣士は百合っ子
26		
― 陸 ―		歴史の中の神様 ― 35
― 漆 ―		昔話の “哀れな” 神様

―壺―

神様の堕ちた場所

むか―しむかしある神様は、太陽神天照大御神にこう告げられました

「貴方は私と似たような力を持っている、そしてもうひとつの力も…」

汝その力を何に使う？」

男「そうだな…大切なものを守る為にもう二度と奪われたくはないから…だからこの力を扱う…」

天照大御神は納得のいくような表情を魅せた。

そしてその場面から反転今にいたる。

男は今、危機的な状況下にいた。

―神と呼ばれている者に言われた

「過去にあつた事は2度と消えない、お前がどんな償いをしようとも消えない、お前

は―――ん　だ　よ、　そ　う　お　前

の―――――だからもう邪魔なんだ

よ、死んじやえよお前エ!!」

そして彼は頭部を蹴られ気絶させられ
下界に落とされたのであった

??? 「ならばこちらの世界へようこそ…」

そんな言葉が彼の頭の中を過ぎつた。

そして彼は――にいた…

ここは幻想郷

人間や妖怪や神など多種多様な生物が、織り成す世界

この幻想郷は忘れ去られたものや、死んだもの、神隠しにあったものを連れてくる世界である。

そんな中ある一つの山の麓の村からの出来事である

これはある日の何気ない日常だ

村から1匹? いや1人の少女が出てきた門を潜って出てきた

? 「さあ、今日もお師匠様から言われてた分の薬は完売したし、永遠亭に早く戻ろうかしらね!」

そう独り言を話す1人のうさ耳の制服を着た少女が

竹林の中に消えていった

今日の昼は驚くの程の快晴だった

今晩は流れ星が流れるかもと村の人は言っていた

? 「今日の夜空は綺麗ね、本当に流れ星でも降ってこないかな??」

まあそんな事あるわけないか…」

しかし夜空ではキラリと光る何かが降ってきていた

そう、何かが

? 「おお! 言った側から流れ星…かな? 何をお願いしようかな? うんそうねえ…あ!面白い事がありまーすよーに! つと!

これで願い通じたのかな? ツて!! 早く帰らなきや怒られちゃうよ!!」

そうして彼女が走りだした先に爆発音とともに、何かが落ちてきた、いや正確には
落ちていた…

チユドオオオン!!!!

? 「一体何ッ!？」

そうして彼女が急いで駆け寄った先には人間?らしきものが横たわっていた

彼女は思いも寄らぬ光景を見て呆然としてした、そしてすぐに気を取り戻し行動した?
? 「え?これって…人間??でもなんで?

爆発音と同じ方向にだったはず…もしかして空から降ってきたの?!

いやいやそんな訳ないそんな訳ない、落ち着け落ち着くんだ私!

普通に考えてあるわけがない…でも…」

そうここは幻想郷

一体何処で何が起きようとも変な事ではない…、が…

? 「ともかく!この人を連れて帰って急いでお師匠様に診てもらわなきゃ!」

そうして彼女は倒れていた人間?らしきものを背負い再び永遠亭に向かって走り出すのであった。

— 弐 —
知らない天井

なぜだろう、頭がぼんやりする…

頭が痛い…痛い…つてか痛すぎる!!

そこで彼は目を覚ました

? 「知らない天井だ…」

なんていうとあるアニメの一言を発言し

むくりと体を起こす

? 「ここは…どこなんだ?なんでこんなところに…」

何故俺はこんなにも傷をつけている?力も出ない、俺は一体何をして…?

彼は頭を過ぎらざる、何故自分がこんなところでこんな格好になっているのかを

? 「駄目だ…思い出せねえ!!

…でも!早く助けねえと!

体をベットから這いずり出そうとするが

身体中に痛みが走りうづくまっつた

? 「…ツ?!痛てえ…駄目だ動かねえ、でもやらなきやいけねえんだよおツ!」

彼が無理やり出ようとしていた時

病室のドアが開いた

永「あら？目が覚めたのね…」

？「あんたは…誰だ？」

男が殺気を放ち見つめている先には赤と青のツートンの服を着ている女性が立っていた

永「命の恩人に対してその言葉使いなの…？」

まあいいわ私はこの、永遠亭の医者をしている八意永琳よ」

彼女の名は、『八意永琳』

此処は幻想郷にある迷いの竹林の中なのだ

？「!?そうか、それはすまない…」

どうも腹が立っていたところだったんだ…とんだ無礼を本当すまない」

とさっきの言葉使いとは対象的に礼儀のある口調に変えていた

永「ああいえいえ、こちらも貴方が倒れていたところを見つけて介抱しただけですから、顔を上げてくださいいな。医者として当然の事をしたまです。ところで貴方の名前は何？」

？「ああ…俺の名は冥咲明 天胤（めいこうみょう あまつ）だ」

永「不思議な名前ね〜?」

あなたはどこから来たの?そして何者なの?教えてくれないかしら?」

天「俺は…」

そう言葉を切り出した途端ふと思った…

『俺は何者なんだ…?どこから来た?さっき話した皆つてら誰なんだ?』

そう考えたとたん彼に激しい頭痛が襲った

天「がア!ア!ア!!ぐおあああ!!」

永「…ツ!大丈夫?!気をしっかりしなさい!!男でしよう!!」

そんな永琳の声も束の間、天胤は再び倒れてしまう

永「…一体どうしたのかしら?それにしても彼…この紋章は…

優曇華!早くにこつちに来てくれないかしら!!」

トタトタトタ

優「はい!なんですか師匠?…え?」

永「…優曇華、あなたは彼を寝かせて看病させておきなさい

私はするべきを事をするわ」

そう優曇華につげ永琳はさつそうと自分の部屋に戻っていった

優「お師匠様何かあったのかな?…それよりも、はあなんだか面倒臭いことが起き

てるんだね私のせいで…はあ…」

優 「この人って一体何者なのかしら？昨日のあの爆発音といい…

ツ!! もしかして！あの流れ星が…この人なの???

『いやいや私どうしてそうなる！』

落ち着け餅つくんだ私！よく考えて！普通はそんな事起きない！

でもでも！

私だつて月から逃げてきたし、他の皆だつていろいろ常識外れだし…』

などと彼女が考えていると天胤が目を覚ましたのであつた

そう優曇華が、布団を掛けている時に

天・優 「あつ…」

両者とも顔が近く息がかかる距離で…

— 参 —
うさ耳の少女の名は。

俺は再び目覚めると目の前には一人の少女がいた。しかし普通の少女ではなく、頭からは兎の耳があり、薄紫色の髪の毛で、顔は非常に整っておりどこか懐かしい学生服を着ている。そしてなにより…綺麗だ…

つて馬鹿野郎!!

落ち着け落ち着け…なんでそんなにも顔が近い??なんだ俺がなにかしたというのか?!いや確かにしたけど…俺は兎に角焦る、そう何故こんな美少女が俺の目の前にいる「うわあああ!!」え…叫ばれた「バシン!!」叩かれた…顔を…

そうして彼女は急いで俺のもとから離れた、顔を真っ赤にしながら。

「ハッ…!ごめんなさい!ごめんなさい!!急に目が覚めたんで驚いて叩いてしまいました!!本当に済みません(泣)」

俺はポケーとしてると意識を取り戻し

「あ、いや!そんなにも謝らなくてもいいですから!顔を上げてください、逆に困りますよ…」

俺が彼女に話すと彼女はゆっくり顔を上げた…顔を真っ赤にしてすこし涙ぐみなが

ら。

「すみません…ありがとうございます…えつと冥眺明さんですよ？お師匠様から看病をしておく様に言われました、鈴仙・優曇華院・イナバと申します、鈴仙と呼んで下さい」

そう彼女は告げるとニコツと微笑んだ。

俺は少しだけ、ほんの少しだけ（本当に少しだけだからな）ドキツとした。

「あ、どうもこれはありがとうございます。」

冥眺明ではなく、天胤と呼んで頂けると嬉しいです、その…鈴仙さん、先程はどのような状況だったのでしょうか…？」

と、恐る恐る尋ねると

彼女は少し焦りながら答えてくれた。

「あの、えーと…ですね！布団を掛けている途中でそこで天胤さんが目覚めました、それであの様な状況に…」

あゝ…つまり俺がやっちゃったのか…恥ずかしい…

「変なところで目覚めてしまいすみません、それで俺はどのくらい再び眠ってましたか？」

と、俺は少しだけ残念そうにしていた…

「1時間程眠っていましたね、眠ってしまった原因は、お師匠様と話している時に貴方がいきなり叫び、頭を抑えながら倒れたという風に聞いております…」

「そうですか、迷惑をお掛けして面目ございませんね…」

「あーいえいえ！ここは幻想郷の唯一の病院ですから、そんな事ありませんよ！」

「???幻想郷?とは一体なんのことだろうか?」

「幻想郷?とは一体なんのことでしょうか?」

そう言うと、彼女は不思議に首を傾けると納得がいったのか手を合わせ

「そうだった！天胤さんはまだこの事を知らなかったんですね！いや、空から落ちてきた」ことをすっかり忘れていました（笑）

「ここは幻想郷といい、人間や妖怪や多種多様な生き物がくらす楽園です。ここは結界により簡単には出入りができないようになっており、忘れ去られたものやいなくなつたものなどが、この幻想郷に来ます。天胤さんは…恐らくですが結界を超えてやってきた外来人ではないのでしょうか?」

彼女はそう告げると尋ねてきた。

俺は考える、俺はーどこから来たんだ???空から落ちてきた?

そう考え込んでいると

「どうしましたか?具合まだ悪いですか?」

お師匠様を呼んできますね!」

と告げ足早に部屋から出ていった

「俺はどこから来たんだ? あれ? さっきまでは分かっていたような…」

とか考えていたら

「あら? 本当に目が覚めたのね。気分はどう?」

と、永琳さんが来た

「いえ、大丈夫です。それよりも永琳さん、俺は一体どこから来たのでしょうか…?」

すると永琳さんは手で話を遮ると唐突に

「いい? 今から話すことをしっかりと聞かぬのよ。貴方は今、記憶を失っている」

「……え?」

「貴方は記憶を失っているとゆったのよ、にわかには信じられないだろうけど信じて頂

戴」

そう告げられた。俺は冷静に考えた、でも俺の答えは決まっていた

「そうですか……まあそんなところだろうと思いましたが」

「あら? 意外な反応ね? もっと焦るのかと思っていたわ?」

「いえ、焦ったところで記憶は戻りませんし、それに……」

そこで俺は言葉を締めた

「?それで?」

「いえ、なんでもありません。」

というのもこんな話を話したところで信じてもらえないだろうし

俺はベットから出て立ち上がり永琳さんの方を向き

「看病して頂きありがとうございます。自分はこれで失礼しますね」

と、部屋を出ようとする

「どこに行くのかしら?」

「??此処にいつまでもいては失礼でしょう?永琳さんはお仕事があるでしょう?俺はここからどこかに歩いて、フラフラと放浪しますよ」

実際ここから出てどうしようかと悩んでいたのだが

そんなことはさておき俺は考えたいことがあった。

だが……

「貴方、ここは妖怪も住むと優曇華から話されたわよね?貴方の様な人間が外でほつき歩いていると喰われるわよ?それと、別に仕事なんてそうそうないわよこんな竹林の中」

そして永琳さんはまるで悪巧みをしている悪党の様な表情をして

「最後に大事なこと……代金は? (ニヤリ)」

あ……忘れてた……金とるんだ……というか妖怪も喰うんだな。弱肉強食かよ。楽園とか嘘でしょ。うん。

「代金がないのならする事は一つねえ???そうでしょ優曇華?」

と話を振られたのは鈴仙さんだったそして俺を気の毒そうに見ながら

「そうですね……頑張つて下さい。」

と、告げて逃げた。え?あの、え?頑張つて下さい?

ナニサレルノオレ

そして永琳さんは俺の方を向きまさかの言葉を放った。

「貴方ここで《働きなさい》」

「……はい?」

そしてここから俺の永遠亭での、いや幻想郷での生活が始まったのである。

—肆—

今日という充実した日

ガラガラガラ

「——って感じで最期の部屋になりますね。アマツさん永遠亭の構造理解出来ましたか？」

「あーはい。まあこれから生活し、直ぐに慣れると思うので大丈夫です」

そう俺に話しかけてきたのは鈴仙さんだった。俺は今日から永遠亭で借金返しと居候させてもらうことになったのだが、俺は嫌な予感しかなかった。あの永琳さんのあの顔には何かしらの理由があるに違いないからだ。いざとなったら逃げ出す覚悟もしておこうと馬鹿な事を考えていたら、鈴仙さんによる部屋の案内が終わっていた。

「ところで鈴仙さん、先程から何をキョロキョロと周りを見ているんですか…？怪しいですよ。」

彼女は部屋を案内している時もそうだったのだがあつちらこつちらと、ずっとキョロキョロしているのだ。まるで何かを探すかのように…

「…ハッ!! いえいえ!!大丈夫ですよ!!それより、アマツさんはこれからどうしますか?部屋の案内は終わりましたし、今日はこの永遠亭もお師匠様が出かけているので休み

ですし…」

「それもそうですね…何をしましょうか…」

などと考えていると、頭上から金ダライが落ちてきて見事に鈴仙さんの頭の上に当たった

ゴーン!!

「…っ痛ったあー!!ちよつとてゐ!何するのよお!」

と鈴仙さんが話した方向には一人の少女が立っていた
なるほどこれがキョロキョロしてた理由なのか

「ありやりやゝ鈴仙また引つ掛かったウサか?本当にドジっ子ウサねゝ鈴仙は（・・・）
▽・、）」

と話しているのは、身長はとても低く、また頭に兎の耳をつけていて人参のネックレストとピンクのワンピースを着ている少女が立っていた

「おっ!そつちの男の人は今日から住むことになった男ウサね!

私は因幡てゐって言うウサ!私のことはてゐの呼び捨てでいいからね!これからよろしくウサねゝ」

といい握手を求めてきた。

「あ…どうも、これからお世話になります。冥暁明 天胤と申します。アマツと呼んで

ください」

そう話し、てゐが差し伸ばした手を握ると

…ネチャ…

ん？あれ？おかしいな、手を握るだけなのになんでこんなにも手がヌルヌルしているだ？うん。

と思っていると

「…あはははは！あんたも引つ掛かったウサね！てゐちゃんは天才ウサね！それじゃあバイバ～イ!!」

そう話し嵐のごとく去っていった…

「てゐったら容赦ないわね…」

「ええ…全くです…」

俺と鈴仙さんは互いに顔を合わせて笑いあつた

「で、鈴仙さん水場はどこですかね。この汚らわしいものをのけたいのですが…」

「永遠亭にはないわよ？そんな所」

「では鈴仙さんの服で落としますね。」

「…ツ嘘嘘!!あるわよ！ほらほらあそこに！…だからね？そんな顔して私の方を見ないでくれる…？その光る手がこっちに伸びてこようとしているのだけれど…」

「いえいえ、そんなことはありませんよ？ たまたま向かう方向が鈴仙さんがいる方向でしたので」

と話し俺は水場に向かい手を洗った

その前に鈴仙さんをどうしてやったのかは言うまでもなからう。

それから鈴仙さんが、着替えてきて、今度は半袖のワイシャツになっていた（普通に似合っている）鈴仙さんが俺の方を向き俺はボディーパーカーを食らわされた、

「そうそうアマツさん、貴方外来人よね？ だったら博麗神社に行かなくちゃならないわね」

と鈴仙さんは話してきた

「博麗神社とは？ 一体どのような神社なのでしょう？」

「そんなに對した神社ではないんだけどね、この幻想郷には結界があるじゃない？ その結界を張っているのがこの神社の巫女、博麗霊夢という人なのよ。その人の所に行けばアマツさんが何の能力があるのかわかるし、それにこの世界での常識を教えてくださいわよ」

「…能力？ とはなんのことでしょうか？」

「うゝん私から説明するのは難しいですね…いろいろとあるので…」

とにかく博麗神社に向かいましょうか！」

そう告げられ俺達は博麗神社に向かうのであった。

——博麗神社——

「霊夢〜!! 霊夢居るんでしょー?!」

鈴仙さんがさつきから叫んでいるのは博麗神社の中にあるちよつとした民家? 倉庫?
? の様な場所だった

その中から

「あーはいはい、今出るわよ…」

と言いい中から紅白の巫女装束を身につけている一人の女性がいた。

「で? なに? 永遠亭の兎じゃないどしたの? 男なんか連れて…もしかして、恋人になつたの?」

とふざけた話をふってきたのだが

「あーいや。俺はそんなんじゃないや」…ツ違うわよ! そんな関係じゃないわよ!! // // // ベベベ、つに、こ、こいび、と、とか! そんなのじゃないからねえ!!! // // 勘違いしちやこつちが恥ずかしいでしょお!?! // // // … (´ω´) え?

いや、鈴仙さんなんでそんなに顔を赤くしていらつしやる…? いや向こうも驚いた顔してるよ? え? え? え?

と鈴仙さんがある意味自滅して場の雰囲気は一気に気まづくなつたが…

「…コホン、えーと俺は冥暁明 天胤つて言います。それでここに来た理由は…」

なんとかかこの場の雰囲気を変えようと話を戻したのだが鈴仙さんはやっと正気に戻ったのか今度は更に顔を真っ赤にしながら涙ぐんでいた…

「なんなんだこの可愛い生き物は…」

と俺と霊夢さんは思う。そこで先に口を開いたのは霊夢さんだった

「ああそーいえばあんた外来人でしょ？ 私の名前は博麗霊夢、この幻想郷の結界を守っている素敵なのうき…巫女よ。あと私のことは霊夢でいいわ」

と向こうが話してきたので、というか今なんか良からぬ言葉が聞こえたような…まあいいや

「なら霊夢この幻想郷についての常識？ というものを教えてくれないか？」

と話す霊夢はわかりやすく話してくれた

霊夢曰く、この幻想郷には様々な生き物がいる

曰く、争いごとはスペルカードルールというもので決闘する

曰く、人はそれを弾幕ごっこという

曰く、この幻想郷にいる殆どの人以外の者が能力をもっている

「…なるほどつまり俺も能力があるかもしれないのか」

「そういうことね。早速調べましようか面倒だし、早速目を閉じて頂戴」

俺は言われた通りに目を閉じると、霊夢は俺の額に手を置き何かを唱えていた。すると、

「目を開けてもいいわよ」

俺は目を開けたと同時に鈴仙さんもいつも通りに立ち直っていた

「それでアマツさんの能力はあったの？」

「あるにはあるわよ……でも」

何故かそこで霊夢は口を閉じたすると俺の方に向かって

「あんた……何者なの？」

「ただの人間様だろ？」

「はあ……あんたは能力を2つ持っているわ。でも私が見つかったのは片方だけ、あんたの能力は、' 全てを照らす程度の能力' よもう一つは私には分からない……」

全てを照らす？程度の能力……？

「詳しく教えると多分だけれども光に関わるなんじゃないかしら？私が見つかるのはここまでだけ、後はあんたが使ってみてから理解しなさいよねー」

「なるほど……教えてくれてありがとう霊夢。」

「いいのよ。なんならお賽銭でも入れてちょうだい、それでキャラにしてあげるわよ」

「あいにく所持金ゼロなもんでな、鈴仙さんなら沢山持つてるぞ」

と話す。と霊夢は鈴仙さんに向けていかにもいまから奪いに行くといわんばかりの顔になっていた

「アマツさん酷いですよ…!!私はこのお金でこつそりと里のお茶処に行こうと思っただのに!」

「そうか。なら俺にもおごつてくれるというのなら助けてやるぞ?」

「ちよつと霊夢こつちに来ないで!?!落ち着いて!アマツさん本当ですか!?!わかりました、奢りますから助けてください!?!」

そう話した瞬間に霊夢は鈴仙さんに向かって飛び込んでいったのだが

次の瞬間、霊夢は何かに弾き返されたように吹っ飛んでいき壁にぶち当たり気絶していた。

「…ッ!?あれ、霊夢は??どこに?」キョロキョロ

「鈴仙さんほれほれお茶しにいくぞ〜」

「えっ?あ、ちよ、ちよつと待つて下さいアマツさくん!!」

俺は何かこの感覚を懐かしく思いながら里のお茶処に向かうのであった。

キヤラ設定

名前：冥咲明 天胤（めいこうみょう あまつ）

二つ名：（現段階では教えられませんネタバレになるので）

身長：175cm

体重：62kg（筋肉質）

種族：未だ不明の神様と???のハーフ

能力：全てを照らす程度の能力、???の能力

代表的なスペルカード：詳細不明

使用武器：天叢雲剣（所属不明）

八尺瓊勾玉（所有者？）

八咫鏡（所有者天胤）

（武器については5話で少し話します）

強さ：不明

特徴：礼儀が正しいときもあるが、それは人で判断する。相手がどのような態度で自分に接するかで臨機応変に対応する。少々Sチック。

場に応じて物事を冷静に対応できるが、一定を超えると冷静ではいられなくなる、神様であったので少々地上の事を知らなかったが為に天然なところも見える。意外と厨二病なこともある。

過去の記憶については倒れた瞬間は覚えてはいないのだがそれ以前のことは覚えている（だが自分自身が何者であったかはまたハッキリとは覚えていない）（（意味わかんねえ設定とか思ってるかもしれないですけど許して下さい…））

もともと神様だった頃は太陽神天照大御神と似たような能力を持っており天胤の配下には、13の動物の形をした神々がいた。（ネタがわかった人は黙って拳手しなさい）二重人格と思わせるような行動も取ることがある。恋心と言うものを理解できていない。

好きな物：みたらし団子と緑茶、何かを成し遂げようとする心

風情がある場所

嫌いな物：虫（特に芋虫やGなど） エゴが強いヤツ、物分りが悪い人、侮辱

名前：鈴仙・優曇華院・イナバ

二つ名：狂気の月の兎

身長：160cm（うさ耳は含めない）

体重：女性に対して失礼よ？

種族：月の兎

能力：狂気を操る程度の能力（波長を操る程度の能力）

代表的なスペルカード：幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）

使用武器：月の武装、手で銃を作り指先から弾幕を発射させる。

特徴：いつも永遠亭の人達に振り回される役割、一応常識人なのだが少しばかり厨二病チックなところも見られる。毎日何をしているのかと言うと大抵はてゐのイタズラに引つ掛かったり、永琳の試作品の薬を飲まされたり：散々な目にあっている。里に薬を販売などをしに行つたときなどは、サボつてお茶処などで妖夢と世間話やお互いの苦労などを愚痴つたりしている。天胤と出会つてからまだ1日しかたつていなかったのだが早速振り回されることも見受けられる。その他は殆どの変わつておらず原作キャラ設定通りだと思われる：かも（多分変わります）

好きな物：永遠亭の皆、甘いものや美味しいもの、厨二病チックな言葉

嫌いな物：お化け、怒ると怖い人、お師匠様の試作品の薬

— 伍 — 半霊半人剣士は百合っ子

タツタツタツ：

「ちよ、ちよつと待って下さいって！アマツさん！」

そう叫んだのは鈴仙さんだった

「…うんにや？なんですか？お茶処行かないんですか？」

「イヤっ！行くに決まってるじゃないですか…：と、いかそれよりも、先ほどの霊夢が吹き飛んだのは…：一体何をしたんですか？」

そう。俺はさつき、霊夢が鈴仙さんに向かって飛び込んでいったのをそのままそっくり、吹き飛ばしたのだ。

「あゝ、あれですか？あれは俺の能力を使ったまでの事です。そうですね、鈴仙さんこちらに向かって石をぶつけて下さい」

「え…？石ですか？」

俺は鈴仙さんにそう話して、鈴仙さんは、‘、’ 思いつきり“石を投げつけてきた。

キュピイイイイン！！

そうすると、石は思いつきり鈴仙さんの方に向かっていき額にどストレートで、命中

した。

「…いてて、ちよつとなにするんですか!?アマツさんが石をぶつけてきて下さいって話したから、投げたんですよ!?なのになんで投げ返すんですか! (怒)」

「いやいや…俺は何にもしてないですよ?」

「…え?」

俺は確かに何もしてない。だが鈴仙さんが投げつけた石は、鈴仙さんの方に綺麗に返った、そう俺は「反射」させたのだ。

「これは俺の能力の応用ですよ、全てを照らす程度の能力。この能力を応用させて投げつけてきたきた石に対して、照らし合わせただけですよ。」

「…それってチート」「さあ!鈴仙さん!里のお茶処に行きましょう!!」

そう俺は急がせ里のお茶処に向かわせた。

「そういえば鈴仙さん。」

「ん?どーしたの?」

「さつき俺に対して投げた石、本気で投げてきましたよね?」

「…ん?なんのことかしら?」

(こいつ…まあ自業自得になったからいいや)

「今、ザマアみろとか思ったでしょ？」

「いえいえ。そんな事ございませんよ〜？」

なんて、呑気な事を話しながら里に向かった。

—————

「ここが里なのか…」

俺は初めてこの世界の里という所に来た。

この里は大変賑わっており、人間達がお互いに楽しみながら生活をしている。

「さあ！お茶処に行きましょう！」

と、俺の腕を引っ張りお茶処に連れていかれた。

「さあ！到着よ！」

とお茶処に着いていた。

すると、中から声が聞こえてきた

「あれ？鈴仙じゃない！お久しぶりね！」

と一人の少女が現れた。

「あら？妖夢？あなたも此処でお休み中かしら？」

妖夢と呼ばれた少女は俺の方を見て、少し睨んできた。

「ねえ？鈴仙その男は？誰なの？」

ん？俺の事か、自己紹介しなくちやならないではないか

「俺は冥眺明 天胤つて名前だ。あんたは？」

その少女は

「私は魂魄妖夢、冥界の西行寺幽々子様に使える、庭師兼剣士兼料理人だ!!」

妖夢と呼ばれる女の子は、銀髪のシヨートで頭に黒のカチューシャを付けており、緑の服に二本の刀を腰に携えていた。

すると、

「あなた、何故鈴仙といえるの？教えて」

と言われたので俺は少しふざけて

「うん？俺は鈴仙さんと、2人だけで出歩いてゐるんだが？何か問題でも？」

俺は少し恥ずかしいながらもそう答えた…すると

「…ツえ？ちよ！アマツさん!!なんでそんなこ…だつて？」

「え？」

すると妖夢は激怒しながら、

「…なんですつて!!鈴仙は…鈴仙は…」

おい。妖夢少し待てそれ以上は百合にな「鈴仙は私の物よ!!」

「…」

こいつ…完全にそっち系の趣味かよ…

「鈴仙を…鈴仙を返せ!!」

と妖夢は二本の刀を手に持ち俺に切りかかってきた。

俺は後ろに下がり体制を整えた。

「うわっ! ちよ妖夢?! 落ち着いて!」

「鈴仙は黙ってて!! 私が取り戻すから!!」

「…えく? アマツさん…自業自得ですよ…」

「まさかここまでなるとは…後でお店に謝っておこう…」

と戯言を言っている

「戦闘中によそ見は命取りよ!」

スperl! 人鬼【未来永劫斬】

といい刀に光が刺した瞬間、俺の方に向かい刀を振るった。

妖夢が振るった刀から光の斬撃が放たれた

「貴方のような人間如きに避けれるはずがない」

(少し痛い目を見てもらうけれど鈴仙を奪った罰よ…!!)

「…あく。悪い」

俺はそう言い斬撃を跳ね返した。

「…ふあっ!?うそ?!」

妖夢は俺が反射した斬撃を紙一重で躲した。

「貴方…ただの人間ではありませんね…?」

「まあ能力持っていないとは話してねえからな」

「貴方の能力は分かりませんが…それなら!」

そう話した瞬間妖夢は俺の懐に入り、刀を振りかぶってきた

「…ッ!?速い!」

ザシユツ!!

俺は頬から血が出ていた。

「痛てえ…速すぎんだろ…」

「いえ、私はまだ未熟者です。ですが私の精一杯を持って貴方を倒します…」

「へえ…言ってくれるじゃん…やれるものならやってみるよ…」

「これで終わりです…」

スperl! 【待宵反射衛星斬】

その瞬間妖夢は物凄い速さで突撃し斬りかかってきた。

だが…

妖夢の刀は俺の身体を切り刻むことは無く、一本の大剣によって阻まれていた。

「…ツ?!」

「アマツさん…それは…?」

鈴仙さんと妖夢は目を丸くし俺が握っていた大剣に目を向けていた

「ああ?これ?なんか能力がわかったときからギフトみたいな感じ付いてきてた」

—天叢雲剣— 古代から伝わる伝説の剣。八岐大蛇を退治した時に腹の中から現れた最強で最凶の剣。

「そんな大きい剣で、私の楼観剣と白楼剣を超えられると思うな!」

妖夢は俺から1度距離を取る…が

「遅せえよ…!!」

スperl!!斬符【一閃神楽】

「うっ…ぐは…」

俺は妖夢の体に一太刀入れると妖夢は力失くし、その場に倒れた。

「え?アマツさん…妖夢を倒したの…?」

「うんにゃ?俺は倒しただけだから…大丈夫…ちよつと待ってて」

俺は鈴仙さんにそうはなして、妖夢の傍に座った

スperl!!蘇符【リザレクションフォース】

すると妖夢のお腹の傷は消えていった。

「……す、すごい……あの傷を一瞬で……」

「妖夢く起きろよ」

俺は妖夢の頬を抓りながら言った。

すると

「……っ！いひやい！いひやいですって！アマツ！」

「おつ悪い……ついつい虐めてしまった……（笑）」

妖夢は何事も無かったかのように立ち上がった。

「妖夢……本当に大丈夫なの？痛くない？」

「鈴仙ありがとう……大丈夫だよ、本当に何ともないよ」

妖夢と鈴仙がお互い話したあと妖夢が俺の方へきて

「アマツ……先程は斬りかかってしまい、すみませんでした……」

鈴仙の事になると少しばかりムキになってしまい……

と、妖夢が謝り始めたので

「あーいやいや、良いよ？別にさっきの嘘だし。というか本当に妖夢って鈴仙さんが好

きなんだね」

すると妖夢はマヌケな顔をして「……え？ウソなの……？」

と顔を真っ赤にして鈴仙に抱きついた。

「うえ〜ん。鈴仙…アマツに騙されたよ〜!!」

「よしよし。妖夢は悪くないよ…悪いのはアマツさ…いやアマツだから…!!よしよし可愛いなく妖夢は」

と鈴仙さんが俺のことを呼び捨てにしながら妖夢をさすっていた。

我ながら妖夢を可愛いと思ってしまったのである。

「それとアマツさ…アマツ?これからは私の事は鈴仙でいいからね?」

「…そうか、優しいな鈴仙」

お互いに微笑みあった。

そうしてその後、お茶処の店主にこっぴどく怒られたのは言うまでもあるまい。

—陸—
歴史の中の神様

俺達は、前回壊してしまったお茶処の店主に怒られてしまい、後ろめたく歩いていた。理由は、俺が妖夢を擲擲ってしまい妖夢の怒りを買って、お茶処の前で戦闘が起き、そのせいでお茶処にいた客は逃げ、店主が大事にしていた店も傷めてしまったからだ。

「あくあ、お茶処に行けなくなっちゃった…もう！これはアマツのせいなんだからね！！今度奢ってもらおうから！！」

「ええ…俺のせいなの？元はと言えば妖夢が俺に斬りかかってきたから…」

「貴方が嘘を吐くのがいけないのですよアマツ？」

「なんだが理不尽な気が…」

「何か言った？（言いましたか？）」「」

（ぐぐツ……なんで俺のせいになるんだよ…）

俺は2人から理不尽な言われように、ため息をつきながら歩いていった。

本当に女って怖いよな…まるで…ん？まるで？

ってか、そんな事よりも…

「ていかなお前ら、今どこに向かって歩いてるんだよ」

「あ……」

いや！お前ら気づけよ！てかここどこだよ？！

俺達は里の中心の方に歩いて行ってしまっていたのだ。ここら一带は妖怪からも襲われることが無く安全で、里の金持ち共が住んでいる所で何とも空気の悪いところだった。

「どうする妖夢？あんまりここには何にもないから引き返す？」

「そうだね、アマツ貴方はどうしますか？」

いやいや……お前ら呑気すぎるだろ……まあいいや

「うーん。俺はここら辺は知らねえからな、どつか面白いところ案内してくれよ」

俺はまだこの里に関しては何も情報がない。これから幻想郷にいるのなら知っておくのがいいだろう。

すると妖夢が、

「では、阿求さんの所に行きましょうか？あそこは面白いですよ」

「へえ、そうなのか？ならそこに行くかあ」

「え……あそこに行くの？」

「らしいぜ、ほら！早く来ないと置いていくぞ」

「ブンショウコワイブンショウコワイブンショウコワイ……えっ!?そ、そうね！行きま

しようか!」

鈴仙はどこか隠している様な雰囲気を持っていたのだが俺と妖夢はあえて触れないようにした。

「とうか、さつき阿求とか言ったよな?その人のどこが面白いんだ?」

「阿求さんが面白いのではなく、阿求さんが書く書物が面白いんですよ。」

「書物…?」

「ええ、稗田阿求…稗田家には『御阿礼の子』と呼ばれる子供が百年から百数十年単位で生まれるんです。稗田家には代々伝わる「幻想郷縁起」って言う書物があるの。たしか約1200年前から転生を続けている存在で、阿求さんはたしか…九代目だったような…?」

「それに、昔は外の人は絶対に入れないような規制になっていたの、でも最近になってきたら一般の人にもその知識が見れるようになってきたの」

「…へ、へえ、でもさ、折角里に来たんだから他の所行きたいなあ」

「ねえ、アマツ貴方ってそういうの苦手なの…?クスッ」

「そ、そんなわけないでしょう、妖夢さんや…?」

「なら行けるよね?」

「ハイ…」

俺は再び深いため息をつき2人に連行されるのであった…

里の中心から少し離れていき、民家が立ち並ぶ中、一際目立ち大きな屋敷があった。

「……何か？」

「うん。」

「嘘だろ…1人の人間には勿体なさ過ぎるだろ…」

俺の目の前には大きな屋敷があり、民家が立ち並ぶ中、かなり目立っていた。俺は呆然としていると、妖夢と鈴仙は先に入っていつていた。俺は後に続くように大きなドアを開け入った。

すると、そこには1人の少女がいて周りにはたくさん巻物が散乱していた。

少女はこちらに気が付くと

「あら？珍しいお客さんね？」

すると即座に

「どうも、阿求さん。先日はお世話になりました。」

と鈴仙が頭を下げていた。妖夢が不思議そうに鈴仙に尋ねた。

「鈴仙なにかあったの？」

「いやあく実は…」

「どうも妖夢さん、鈴仙さんはね永琳さんと一緒に先日ここに訪ねてきたのよ。それで何をするかと思えば薬の調合材料やレシピなどの書物を一日中漁っていたのよ」

「そ、そうなの？鈴仙…」

「どうなんだよ…だからもう、あの記憶が蘇ってきて…」

鈴仙は肩を落とし床にイジイジしていた。妖夢が苦笑いをしながら背中をさすっていた。おい妖夢、何故鼻から血が出ているんだ…

「それで…？そちらのお客様は…？」

阿求は俺の方を向きそう話した。

「どうも、先日幻想入りってやつをしました。冥晓明 天胤です。」

俺はその名を口にした途端、阿求が「え…」と口にした…。

…ん？俺なにかいけないこと話したかな？

「あ、貴方、今、【冥晓明 天胤】って言ったわ、よね…」

阿求が途切れ途切れに、驚いてるのか知らないが訪ねてきた。

鈴仙も妖夢も不思議そうに阿求を見ていた。

なんだよ…そんな事か…

「ええ…そう言いました…」

その瞬間、目にも留まらぬ速さで阿求は俺の首筋に一つの書物を突きつけてきた。

「…読んで…」

阿求の態度が急変したので、俺達は何事かと思ひ慌ててその書物を開けた。

そこには

【太陽神天照大御神】ノ血ヲ引キ継ギシ【白野威人神冥明天胤様】カノモノハ多獸ノ神トシテモ崇メラレ人ノ幸セヲ運ブ神トシテモ崇メラレテイタ
ダレカラモ崇メラレ幸セニ生涯ヲマツトウシテイクノダロウ】

え…？

俺は理解出来ずにいた。なんでこの書物には俺の名が書かれていて、崇められているのか。俺はあまりにも急な事態により事の大きさを把握出来ずにいた。それは鈴仙も妖夢も同じだったようだ。

しばらくの沈黙が流れた間、始めに口を開けたのは阿求だった

「いい…貴方はこの書物に書かれている人物なのよ…冥晓明 天胤、またの名は【白野威人神】とね…」

「つ、つまり…アマツは神様なの…？」

「この男がですか…？そんなの有り得ません！この男は先日幻想郷に来たばかりでしょ

う?!」

「で、でも…妖夢…」

「妖夢さん…この書物は本当の事しか書きません…彼、冥咲明さんは神の一人なのです。それも最高神の血を引き継いでいる…」

「…そんなことつてあるの…?」

俺は何か頭の中の違和感を覚えた。

「俺にもまだはつきりとはわからない…だけど…ッ!!」

「…?…だけど?」

痛てえ…俺は指先一つ動かす事ができずに、その場に倒れた込んでしまった。

「「!?」」

「アマツ!アマツ!どうしたの!?!ねえ!アマツ……………」

俺は彼女達が話している声が段々と遠くなり、ズキズキと再びあの時の頭痛が呼び覚まされてきた。それは段々と強くなり俺は再び気絶してしまった。

ね

…ね

sね…

死ねよお前。

死んじやえよおオオオ!!お前エエ!!

「…ッ!!!」

俺はまたあの言葉を聞いてしまった…

—漆— 昔話の “哀れな” 神様

私達はアマツが阿求さんから渡された書物に目を通していた。

なんでも、アマツはどうやら「白野威人神」と呼ばれる存在だったらしい。私はその事が今でも信じられずにいた：

鈴「ねえ：阿求さん。本当にアマツは神様なの：？」

阿「おそらくですがね。しかしあの反応からすると：」

妖「神様だったって事ですね：」

鈴・阿・妖「：：：」

私達3人は再び沈黙の中に消えてしまった。私はあの夜の流れ星が、「天界から墮ちてきた」アマツだったという事知ってしまった。

彼は何かしらの原因で天界から墮とされ、運良くこの幻想郷にきたというのだ。原因についてはまたあとからアマツに尋ねるとして：

鈴「そういえば阿求さん、その書物はどのくらい昔にあったものなのですか？彼、アマツが太陽神天照大御神の血を引き継いでいるなら私達が名を知っていてもおかしくはないでしょうか：？」

阿「それがこの書物は最近見つけたものなのよ…」
すると妖夢が

妖「最近…ですか？」

阿「ええ…ここ一週間前の事よ」

『私がこの屋敷の掃除をしていたら、ポツンと棚の前に落ちていたの。こんな書物あったかしらと思いつながら中を見てみたのそうしたら、さっきの通りの事が書いてあったよ…まるで誰かに置かれた様な感覚をその時は覚えたわね…』

私達は阿求さんからそう話され少し納得をした。

それにしても…

鈴「太陽神天照大御神の血を引き継ぎし神様ね…」

妖「普通であれば8人しかいませんでしたよね…しかしその中には【白野威人神】なんてものはいない…となると」

阿「歴史から隠蔽され続けた存在…しかしそれではこの書物の【多くのものから崇められていた】という事実には結びつかない…」

鈴「アマツは一体何者なの…」

そんな事言つたって誰も答えてくれない。誰も知らないからわからない…彼が何者なのかなんて誰も知らない…

なんて事を思っているとあの声が聞こえてきた。

？「俺は俺だろ」

鈴・妖・阿「！！！！」

そこにはいつもとは少し違うアマツが立っていた。頬には何か不思議な紋章が入っており、髪もいつもの赤紫色から銀髪に変わっていた。

そんなことより：

鈴「アマツ：いつから起きてたの？」

天「ん？阿求が書物見つけたって所ぐらいから？」

鈴「そんなにも：それより、もう痛みはない？」

天「ああないぜ！しいて言うならばいつもより身体が軽くなったな！

それと：記憶は戻ったぜ！！」

え？

記憶が戻った？アマツは確かにそう告げた。

妖「貴方：いつのまに？」

天「そうだな、眠っている間につてところだな。ある人が教えてくれたよ：…なんか自分の年齢を詐称しているような人だったなく傘を持って、髪は茶色で：」

鈴「誰のことかしら…？ま、まあその人が教えてくれたなら良かったじゃない！」

天「まあそうだな！とにかく目が覚めとことには変わりねえしな！」

俺はなんとかその場から離れようとしている所だった。あまり触れられたくないこともあったからだ。

すると、鈴仙と俺が話している所に険しい顔で阿求が俺に聞いてきた。

阿求はやはり俺の痛い所を突いてきた。

阿「冥暁明さん、貴方に尋ねます。貴方は一体何者なんですか…」

はあ…やっぱりその事を聞くよな。

そうだな…

天「なら阿求…俺は一体何者に見える？」

阿「…？それは質問の意味を理解しかねますが貴方は概ね人間でしょうか？」

天「残念だな。俺は人間と神のハーフだ。しかもなかなか特殊な事例のな。」

阿「…つまりどのようなことでしょうか…」

天「俺は人間でありながら神だった、しかも白野威という狼の姿にもなれる神だ。つまりお前らが知っている名で話すと現人神と言ったところ？まあ俺はそんなものではないのだがな。」

そう、俺は人間という身でありながらその身では強大すぎる力を注がれていた。

天「そうだな…お前らに昔話をしてやろう」

鈴「昔話？」

天「ああ…一人の哀れな神の話だよ…」

むか—しむかし、そこにはある一人の人間がいました。

その人間は特殊で現人神という存在だったのです。

その者は多くの人から信仰を集めており、立派に生涯を全うしたのでした。

しかしある日、とある神がその男に言いました。

？「貴方は地上にいるべき存在ではありません…私どもと天界に参りましょう…」

その神に言われるままの男はその神について行きました。

そこにはたたくさんの神々が降臨しており、その中でもひときわ目立っていたのが、男を連れてきた神【太陽神天照大御神】でした。

天照「貴方をここで、信仰を集めてもらいます。そうして他の神々と同様に沢山のもとの力を分かち合い、沢山の人々を幸せにするのです。」

男はそう告げられその日から境に他の神々と沢山の信仰を集めておりました。しかし彼だけ以上な程信仰を集められるようになり、ただの現人神ではありえないと思われる他の神々が【太陽神天照大御神】に尋ねたのです。

その男は「太陽神天照大御神」に額を触られ判明したのが「天照大御神の血を引き継ぎし、白野威の力を持つている神　白野威人神（しらぬいじんしん）」と判明したのでした。

そうして判明した途端多くの神々が彼を憧れそうして妬んだのです。

そうして彼は獣の神であるので自分の配下に13の神を創造しました。

龍・鼠・猿・猫・虎・猪・牛・羊・馬・大蛇・鳳凰・兎・鯨

この獣達を中心に殆どの獣たちからもその男は崇められるようになりました。

しかし、その事を妬んだのです神もいました。

その名は「月読命」の神でした。

彼は姉である「天照大御神」に対して同等の力を持つていることに不満があり彼は夜の力を使い、闇夜の者を召喚しその男を信仰していた人や獣を殺戮しました。

そのことにより月読命は今まで大人しかった性格が一変し狂気に満ち溢れた性格となつてしまいました。

その事をした「天照大御神」はその男を呼び出し再びかの事が起きないように「月読命」を抑えてくれと力を授けました。

そうして「天照大御神」はその男に問いました。

「貴方は私と同じ様な力を持つている…汝その力をどのように使う」

そうして男は答えました。

再びあの出来事が起きないように力を使うと答えました。

そうしてその男は月読命を抑えに行きましたが、信仰を失ってしまった以上、天照大御神の力を授かったとしても月読命には勝てませんでした。そうして男は敗れ、月読命に地上に墮されたのです。

天「…つて感じの昔話だな…」

俺は「哀れな」神様の話をした…そうとても哀れな…

しばらくの間沈黙という時間が流れた…

皆下を向いたまま誰も話さない…まあこんな話哀れすぎるだろうな…

俺は天を仰いでしまった…もつとも醜いと思う空を…

すると

鈴「…つまりその神様は今どこにいるのかしら？」

天「さあ？どこかにいるだろう。地上に墮ちたのなら大丈夫だろ」

と話した。すると阿求が俺にこんな質問をした。

阿求「冥暁明さん…貴方はその昔話【月読命】をどう思っていますか？」

俺の心の中でそんなものは最初から決まっていた。

アイツに敗れた時から決まっていたことだ。

天「：そんな事決まってんだろ。あのクソ野郎を殺すっていう思いしかねえよ。」

そうして俺は本音を吐いた。

すると阿求は微笑み

阿「ではこの幻想郷において貴方のする事は決まりましたね…」

え？決まったのか？

鈴仙妖夢も

妖「ええそうですね、仕方がありませんが貴方の為に付き合つて上げましょう。」

鈴「アマツ：任せて。私には貴方を救つたという事があるでしょう？私は貴方に最大

限協力するわよ！」

鈴仙はそう言い俺の手を握つた

鈴「アマツ！いや白野威人神冥暁明天胤!!私は貴方の事を助けるわ!!

だから：もう1人で行かないで：信仰を取り戻し【月読命】をぶつ飛ばしましょう!

あんな奴に月の神を名乗られたくはないからね！」

ああ…ああ…

俺は頬に何かつたつてしまった。何か液体の様なものだ。

天「鈴仙：妖夢：阿求：本当にありがとうツ：!!」
俺はその場で泣いてしまった。

それを見た鈴仙が俺を抱き締めてくれた。俺は鈴仙の懷で今まで溜めていたものを吐き出した。

その時の鈴仙はどこか懐かしい母親の様な感覚が残った。

それから少したつて俺は恥ずかしくなり1人で隠れていた。

鈴仙も何処か照れてるようでお互いに恥ずかしくなっていたが、阿求に関してはそれをニヤニヤしながらこちらを向いており鈴仙を冷やかしていたが、妖夢に関しては俺に對して殺気を放つばかりであった。